

丹波市男女共同参画センターだより

私のからだのことは 私が決める

女性たちは、自分のからだのことを知る必要があります。なぜならば女性が自分のからだを大事にするために、自分で意思決定をする必要があります、そのためには情報が必要なのです。お洋服を買う時に、その素材やサイズの情報が必要なようにです。特に、女性の体の仕組みとホルモンのこと、そしてそれらがジェンダーと関連していることを知ってほしいのです。

臨床や教育の場で、多くの女性たちと出会ってきました。性器に異常を覚えても、はっきり名称をいえる人が少ないです。それ以前に、自分で性器を見たことがない人もいます。月経過多で貧血になっていて自覚があっても、大丈夫とやり過ごしている女性もいます。月経痛がひどくても、薬は常用すると効かなくなるからと誤った知識を母親から教えられ信じて、受診することなく我慢している女性もいます。不正出血があるにもかかわらず更年期だからと放置し、のちに子宮がんが発見される女性もいます。分娩は寝てするものだと思い込んでいる産婦さんもいます。就労女性では、長い会議中に月経用ナプキンの交換のために席を立てずに困難を極めていることも聞きます。避妊方法は、コンドーム（77.4%）と性交中絶法（膣外射精）（17.7%）*で、依然として男性主導の方法をとっています。



高田 昌代

（神戸市看護大学 教授）

女性たちは、自分のからだなのですから、もっと大事にしてほしいのです。しかし、このようなことは女性たちの責任ではなく、そうせざるを得ない状況があるのではないのでしょうか。女性たちは、性器を触ったり見ることはタブーだと教えられていたり、月経は恥ずべきものだから相談や言い出すことができなったり、正しい知識を得る機会がなかったり、ピルの入手が困難だったり、自分の受診や検診より家族の日常生活を優先しなければならない状況があるなど、月経に対する穢れ意識や性別役割分業観、男性中心・医療者中心の社会も影響しているのです。

「私のからだのことは私が決める」という当たり前の社会になるためには、女性たち自身、つまり当事者がこの社会を変えていく大きな力になると信じています。自分たちから変える、変わることで社会が変わるのだと思います。一方で、女性の健康の権利を尊重する社会が必要です。例えば、近年、国は、がんに罹患した方が、治療をしながら仕事が継続できるように、周囲の方の理解を促しています。このように、女性の健康は、女性たちだけのものではなく、男性も含めて社会全体で考えてほしいと思っています。まずは、小学校での月経教育を、男女一緒に受けることから始めてみませんか。

* 国立社会保障・人口問題研究所：第15回出生動向基本調査（結婚と出産に関する全国調査）,2015,p.46